

ヨーロッパ文化文明像 V

古川氏 幸

A Portrait of European Culture and Civilization V

Ujiyuki Furukawa

目 次

[G] イギリス

1. 伝統に輝く歴史
2. ユニオン・ジャック
3. 首都 ロンドン
4. 国会議事堂 Houses of Parliament
5. ウェストミンスター寺院 Westminster Abbey
6. ロンドン塔 Tower of London
7. ウィンザー城 Windsor Castle
8. 大英博物館 British Museum
9. オックスフォード大学 Oxford University
10. ケンブリッジ大学 Cambridge University
11. ハイドパーク Hyde Park
12. ストーン・ヘンジ Stone henge

1. 伝統に輝く歴史

4世紀にわたって7つの海に君臨し、栄光の王座に泰然と安座した大英帝国の黄金の夢を追うかの如く、巨大な過去の遺産が民族の上に光り輝いているロンドンは、それ自体壮大さと保守性とゆるがざる伝統とを固く守る英国のシンボルでもあろうか。ロンドンは、石と煉瓦の大建造物が並んで19世紀を頂点として世界を圧した栄光の歴史が展示場のごとく充満した都であ

る。

若いロンドン子達は、旧い伝承とは奇妙な異和感の中に、外では意外と現代的生き方をエンジョイしているが、家庭的には依然として家は厳格な城であり、格式の高い居所である。かつては王侯、貴族、保守的政治家、高級官僚たち、或いは学者、宗教家、財界の指導者達、これらを総称した頂点を占める支配層を呼称する言葉としての「エスタブリッシュメント establishment」の概念が今や大きく揺れ動きはじめたのが現代のイギリス社会であり、それ等を代表する都市がロンドンである。

今起こりつつある静かな革命は、エスタブリッシュメントそのもののの中に胎動している伝統や毛並の問題から実力と能力尊重への脱皮の姿である。ひしひしと感じられる過去から未来への大きい変革の波動である。或る人はロンドンを見て「斜陽に映える残光を追って」と表現しているが、黄昏せまる残光は沈み行く太陽の壮厳さを秘めて美しい。雄大で神秘である。

ヨーロッパ大陸からは、僅か一時間で着くヒースロー空港へといきなり着陸するよりは、大陸の東端のフランスの海岸線からドーバー Dover 海峡を渡って英本土へ足を印する方がはるかに印象的で楽しい。海峡の潮流は荒いが波頭をけて異国へと渡る船旅の情趣はまた格別である。

日本ではこの三月を限りに世界最長の青函トンネルが開通して連絡船はその使命をなし終えたが、多くの人々が本土と北海道とを結んだ青函連絡船の面影に郷愁を覚えて最後を飾る終焉の日に乗船客が殺到した。日本と異なり、完全に国境を異にする二大国を隔てるドーバー海峡こそ、幾世紀にも及ぶ多年の懸念であったが容易に実現できなかった海底トンネル開削に愈々着工することとなったから、何れは古い歴史を残す英仏を結ぶ連絡船にも終焉の日が訪れるであろう。国を異にするフランス側の港のカレー、ダンケルク、ブローニューの何れかを発して約一時間半を要するこの海峡航路一帯は、古来ヨーロッパ大陸とイギリス国土との複雑な国交の枢機を握った大西洋上最大の役割を果たした海域であった。とくにカレー、ダンケルクの海浜はノルマンディ上陸作戦を敢行し第2次世界大戦の運命を決した激戦の地であり特に記憶に新しいところ、横断時間僅かに1時間半で真白い白亜質のブリタニア島の岸壁に近づく。ここはかつてシーザーがBC55年にブリタニア上陸作戦を敢行した地点で、シーザーの『ガリア戦記』には「白い国（フルビオン）」と記されているが、まさに白皚々とした絶壁が長々と海岸線をさえぎり高さ375フィートある断崖の上には重々しくドーバー城が聳えている。

ドーバー海峡を越え白亜の岸壁を登れば一変して重厚着実なイギリスの精神風土に触れる。過去3世紀、世界の政治・経済・文化の中核となったテムズ河とその中心ロンドンをとり巻く周辺一帯には、あらゆる文化と文明の歴史像が、おおらかに落着いて誇り高く伝統の力を発揮し、總てが壮重で健全なイギリスが近代国家成立へと進む歴史の姿は極めて複雑である。とくに王朝の交替、絶対王政形成に至る王位継承をめぐるランカスター家一派とヨーク家一派との封建勢力を二分して激突する30年間のバラ戦争は、弱肉強食のあさましい姿ともいべき壮絶な死闘である。運命の様々の様相を秘めてテムズ河の流れはタワー・ブリッジの下を豊かな水

量を漂わせつつ岸边に小波を寄せている。血の塔の別名で名高いロンドン塔の下を黙々と流れ去ってゆく。チューダー王朝の成立をめぐる悲劇の塔の物語は尽きない。母親アン・ブリーンと同じように「反逆者の門」をくぐりながら幸運にも生還したエリザベス1世はチューダー王朝の極盛期を築きエリザベス女王（即位1558年）として君臨する。かくしてスペインの無敵艦隊を潰滅したエリザベス時代が到来する。大英帝国の基礎はここに確立したのである。

2. ユニオン・ジャック

ユニオン・ジャック Union Jack とは総合された艦首旗の意味で、イングランド・アイルランド・スコットランド三つの国が十字架で青地の上に赤と斜十字の白の色で重なりあって原形をつくった英国国旗の呼称である。七つの海を制圧し、世界に君臨して日の没するところ無しとうたわれたヨーロッパの王者のシンボルである。1603年にエリザベス1世の没後、スコットランド王ジェームズがイングランド王を兼ねることとなって、二国の連合国家が出現した。もともとイングランドでは、白地に赤の赤十字旗セント・ジョージ旗を掲げ、スコットランドでは青地に白の斜十字を型取るセント・アンドルー旗が飄っていたのが、合体したのである。その後200年を経てイギリス勢力が漸く頂点に達する頃、アイルランドもここに併合されるに及び、アイルランドのセント・パトリック旗の白地に赤の斜十字旗が更に重ねられることになった。原形のまま三つを重ねては白い斜十字が消されてしまうので、赤の斜十字を細く組み合せて三つの旗が巧みに総合された。ここに連合王国の象徴ユニオン・ジャックが定まったのである。かつての大英帝国は第2次世界大戦後は国連の理想とする植民地解放宣言（1960年）に従って次々と植民地の独立運動が開始され、英連邦の名称のもとに一大変革が生じた。即ち静かなる革命は七つの海に浸透し、今日ではイギリス

は単なる宗主国の地位で留まらざるを得ない体制へと変った。比較的平和裡に大英帝国から分離したものは、今でもその国の国旗の左上にユニオン・ジャックを染めぬいている。オーストラリア、ニュージーランド、旧カナダがそれである。オーストラリアは青地に白ぬきの南十字星を配し、ニュージーランドは同じく紫がかった濃い青地に南国の空に美しく輝く南十字星を四個、周囲を白わくで囲んだ赤色の鮮やかな星の形で配置した。太平洋のツバル、フィジー2独立国も元宗主国イギリスとの関係を残した。カナダの国旗は最初ユニオン・ジャックを左上に掲げて、赤地に五つのシンボルからなるカナダの国章を配置した。カナダの成立は本来イングランド系、スコットランド系、フランス系住民の団結によって出来た国家で、それぞれの紋章がその中には細かく画かれていた。下段1/3には白地に全カナダ国民の象徴であるかえでの葉が3枚あったが今は1枚葉の旗に変わった。激しい独立運動を経由して漸く独立を確保したインドの如きは、全くこれらとは国旗の趣を異にする。ユニオン・ジャックが十字架の組合わせであり、その原形は皆守護聖人の名に因んだものの、その他ヨーロッパの国旗には十字架を形どったものが極めて多い、ここにもヨーロッパの文化文明の根底に備わる精神的基盤が何であるかを深く認識する重要な問題が潜んでいる。

3. 首都ロンドン

現在イングランドとスコットランドとウェールズの三国と更に北アイルランドをも加えた共同体からなっている連合王国が、政治的外交的にはアングロ・サクソン民族を代表する一国家の形態をなす英国は、地方毎に文化的・宗教的生活体験も、背景の自然とそこに生まれた風物もかなり相違する国家であり、その国土はそれ程広大ではないのに、意外に田園風景が多く、山丘地帯や湿原の荒野が至るところに残っていて、北へ行けば行く程自然の情趣の濃厚な国土

に恵まれている国である。

アメリカを訪れるにはその目的が何であり、どの都市を訪問するかでおよそ様相が異なってくるが、それは国土の広大さとあらゆる民族の融合した人種のルツボであることに由来するに相違無いとして、ヨーロッパにあって、大陸から離れた小さい島の集まりである筈のイギリスの風貌は、およそ日本人の予想に反する多元で多彩な要素をもつ。イギリスには多くの顔と姿があると表現するのが正しかろう。大英帝国のシンボルである大都市ロンドンすら、意外な公園都市として花と緑にうろおっている。他面、過去の栄光を秘めた石と煉瓦のすすけた建造物や人々の雑踏から逃避したければ、何時でも気のむくまゝにしばし自然の懷に憩う余裕に恵まれた国である。春夏秋冬つねに多彩な趣に満ちたこの国土では、人口800万の大都会ロンドンですら、その1/3は建物の無い空間環境で占められ緑は豊かであるし、樹林とともに川や池の水も湖のように豊富だ。

このロンドンを毎年世界各国から訪れる訪問客は約1000万人と称される。ロンドンの魅力はその歴史と伝統の重厚さ、泰然としたゆるぎなき文化の殿堂であることであろう。われわれ日本人にとってはイギリスの文化は明治以来の日本の西欧化の基準となってきたこと、英語圏のルーツであること等、その点フランスのパリに居るよりは遙かに親しみ易く心の安らかさを覚える。疲れたら憩うべき広々とした美しい公園に恵まれ、知識の源泉の博物館と美術館の各種の文化財が、いとも気楽に無料で旅人を迎えてくれることにある。

4. 国会議事堂 Houses of Parliament

中世以来長年月の間に徐々にイギリスだけに発達していった立法の府である議会在、予算審議権をも確保し近代議会の原型が定められてゆく。権利章典に基づいて王位継承も議会によって決するというイギリス独特の権威性高き議会

主義が確立した。イギリス議会制度成立には実に700年もの久しい歴史を経てテムズ河の畔に基盤ができたが、議事堂は1834年のロンドンの大火の後に、後期ゴシック様式の壮大な構造で独得の偉容を以て再建された。地形は500年もの長期にわたる王宮のウェストミンスター宮の所在地で、四角形の建造物の先端にそれぞれ同形の4本の塔が空高く聳えるヴィクトリア・タワーのあるところが上院で、頂上に国旗が翻り、テムズ河の下流に当る北方のウェストミンスター・ブリッジの側に時計台ビッグ・ベン Big Ben の位置には下院が控える。テムズ河の対岸から望み見られる広大な見事な全景が偉容を誇る泰然とした姿はまさにロンドンの象徴でもある。

議場内部は国会の閉会中の土曜日には一般の見学も許されるし、女王誕生日の祝典はこの国会議事堂で行われるという、他国では見られない情景がくり広げられる場所でもある。議会開会に当って（国旗は開会中掲揚）国王は上院にだけ出席し演説するが下院へは出場せず、下院議長の前にはメース Mace という杖を置く。これが国王臨席の象徴である。杖が無くては議会は開かれない。議場内部は意外に狭く議長席前の通路をはさんで右側に閣僚と與党、左翼に野党の座席の古風なベンチが並び、ベンチの前方24cmに両陣営仕切りの赤線が真直ぐにひかれている。騒乱の生じた時の境界線である。後輩議員は後方の立席に立つ。座席間の距離をへだてる境界線といい、議場で使用する言葉にも厳格な禁句があって、相手を感情的に侮辱しない為の形式的な制度が定められている。議場での発言に万全の注意を払うためである。世界における憲政の中枢であるイギリスには、実は他国にみられる憲法は無い。イギリスではマグナカルタ Magna Charta と権利の章典 Bill of Rights の二つの原典が動かすことのできない精神と仰がれているが何人も読める文体ではない。イギリス憲法の内容は毎年変る。例えば1988年の Parliament act として作用する。古

い伝統の中に年々新しい政治が行われる活動力はここから生れる。老大国イギリスの生命である。

5. ウェスト ミンスター寺院

Westminster Abbey

イギリスには大聖堂 Cathedral が28ヶ所もある。その中でも最も格式高く歴代の国王の戴冠式も国王・女王の即位の場もこの寺院内にある。国会議事堂のビッグベンとヴィクトリアタワーの西方、ヴィクトリア・ストリートの角に寺院は建っている。テムズ河から眺めては議事堂の陰にかくれて全貌が判別しにくい、遠く左端に高い二つの塔が望まれるのがそれで、橋を渡った西岸のトットビル通りからは見事な2本の太い四角い塔の上空四隅に南北各4本の尖塔が立って威容を示す。議事堂と併せて広大なこの地域一帯はロンドンの象徴とも云うべきもの。聖堂の中には中央にチャーチル記念碑、無名戦士への花輪、ニュートン、ダーウインの墓につづいて奥は19代に及ぶ代々の王家の墓が占め、中でもヘンリー7世のは特に大きい。天井は垂直に切り立ったパーペンディキュラー Perpendicular 式の絶壁をなしている。その下には700年前の戴冠式に用いられた木製の椅子が今もそのまま備っているが、これは幾度か王座をめぐって奪回されたいわく付きの椅子、興味深いのは詩人のコーナーでそこにはチョーサー、ロバート・ブラウニング、テニスン、チャールズ・ディッケンズ、ワーズワース、エドモンド・スペンサー、その他音楽家ヘンデル、サムエル・ジョンソン、更にシェークスピアの像等が残され、流石に完成まで500年を要した大聖堂の内部も外観もすべてきわめて荘重である。聖堂が重要な国家的行事や著名な人物と幅ひろく関わっている点など、諸外国のそれとは大きい相違があるのではなかろうかと思ひながら大空に聳立する高い塔を仰ぎみた。

6. ロンドン塔 Tower of London

テムズ河のタワー・ブリッジ Tower Bridge を渡ると、夏目漱石のいわゆる「英国の歴史を煎じ詰め……幽光を20世紀の上に反射する塔影が幻の如く描き出される」と記した11世紀以来宮殿としてはヨーロッパで最も古く、二重の堅固な城壁で囲まれ城塞であり、牢獄、それも異様に陰惨な数々の悲劇にくすんだ暗澹たる幽閉の門と扉にとざされた刑場を避けて通ることのできない宮殿がロンドン塔である。中央にあるホワイト・タワーには甲冑武器のコレクション、ウエーク・フィールド塔には載冠式用の王冠、世界最大のダイヤモンド入りの王笏は華やかである。がおよそ血なまぐさい英国歴史の数々を秘めた館である。世界何処も権力の座をめぐる争奪の悲話は絶えないが、英国王朝史には特にそれを強く感ずる。フランス革命には4000人の血で染まったコンコルド広場よりも一層に強く往時を思わせる場所である。城塞の構造は広大でかつ堅固、その名の如く多数の塔が様々の形をして林立して河畔の一角を占めている。

7. ウィンザー城 Windsor Castle

ロンドンの中心部からテムズ河を遊覧船で遡れば50分、汽車でもバスでも気楽に見学が楽しめる王室の離宮である。ロンドン市内にはバッキンガム宮殿、ケンジントン・パレス、セント・ジェームス・パレス、郊外にはハンプトン・コート・パレス等と並んでウィンザーは城塞であるとともに850年間も国王女王の居城となって親しまれた最古の居城として名高い。エリザベス女王はバッキンガム宮殿よりもウィンザー城を愛好されここに住まわれることが多い。女王滞在時は城郭中央のラウンド・タワーに英国王旗が翻ってイギリスらしい情趣の漂っている城郭であり、規模最大の堅固な城塞でもある。城内のセント・ジョージ礼拝堂はその豪華絢爛たる

内装で名高く、また毎年6月にはエリザベス女王やエジンバラ公等の王族が全員参列して行うガーター勲章受章者の行列の偉容誇る豪壮極らない行事も、古典的な儀式を好む英国王家の恒例の祭典として名高い。

ウィンザー城の全貌は、歴史的沿革を辿れば実に11世紀に遡り、以後19世紀にかけては歴代の国王、女王が城の改築・増築を重ね、年代別に様々の様式の建造物の集った極めて堅固な城壁と尖塔で守られて世界最大の王室居城と称されるまでに規模が拡張された。城の南は広大なウィンザー森林公園からなり、その緑地一帯をザ・グレート・パークと呼び面積2000ヘクタール、周囲23kmの広大な規模からなっている。バッキンガム宮殿とは異って一部宮殿内へも入れるが、ここでも行われる衛兵交代は万人が見て楽しむ一種のショーと化してきた。旧時代の王家の面影を伝える行事であり国民に親しみと楽しみを与える業と観てよい。ウィンザー城はウィンザー一帯の自然環境が国民の憩いの場であり楽しい遊園地である。日本で例えれば明治神宮外苑か、伊勢の内宮外宮の神域がもっと一般化した雰囲気から成り立っていて、城廓には女王の居られる期間だけ国旗が翻っている趣等まことにイギリスらしいと思った。イギリス女王と国民や国家との関係のおおらかさを微笑えましく感じた。

8. 大英博物館 British Museum

ブリティッシュ・ミュージアムは18世紀の頂点に立ったイギリスが法令によって創立した博物館として世界最大を誇るもの、1753年6月イギリス国会で議決され1759年1月15日を期して華々しく開館された。アン女王付きの典医ハンス・スローンは当時の碩学の誇れ高く、動植物や鉱物の標本と書物の収集家として著名であったが、彼の残した各種の多量な資料と標本のコレクションを一括してそこに保管する事業から開始された。およそ博物館や美術館又は資料館

が小型方式の部屋からなるキャビネット方式と、細長く整然と並び明るい採光の下にきれいに陳列させるギャラリー式の館の方式との二種類の類型で発達するようになるのはおよそ17世紀以後のことで、最初は国王や諸侯等が個人の財宝を自己の邸宅の中に保管したもので一般に公開されることはなかった。大英博物館の創設によって18世紀以後は「公開の原則」が打ち出され、最初に大英博物館がそれを実行した。

大英博物館の所蔵品は極めて幅広い分野から集められた夥しい数量の物品が展示されているが、当初からギリシャのパルテノン神殿から外交官であったエルギン伯爵（1766～1841）によって運び出されたエルギン・マブルや、ナポレオンのエジプト遠征の際に従軍した考古学者により発見された発掘品等、名高いロゼッタ・ストーン Rosetta Stone やアッシリア、バビロニアの貴重な古代の遺品も並べられ、全世界の美術工芸品、重要な図書文献、各種の学術的資料等実に広範囲の領域からの出品が網羅されている。

古代・中世の東西の世界の彫刻・美術の広汎にわたる蔵品の価値は、フランスのルーブル美術館とも対比される。博物館としての蔵品の種類と数では、美術館であるルーブルをも凌ぐ世界最大の規模のコレクションからなる。圧巻はその中央にある附属図書館で、常に30,000冊の本が閲覧され、ここでカール・マルクスが読書に没頭しつつに資本論を執筆したところである。図書館の規模は世界第一で蔵書数は700万冊、新聞40万部と称せられている。全館を詳しく見学するには一ヶ月を要すると云われるが、簡略に主要な展示物を紹介すれば、正面玄関を入ると直ちに左手には名高い古代エジプト王朝の彫刻群が揃い、これに並んでアッシリア、バビロニア、ギリシャ、ローマの順序で驚く程見事な数々の遺品が列べられている。一階の入口を右手にまわると、イギリス統治の精神的原典であり魂と云われるマグナカルタ Magna Charta（大憲章1215年）が大きいガラスケースの中に

収められている。二階には、エジプト、ギリシャ、ローマ、インド、中国、マヤ文化の順位に飾られた地球上存在したあらゆる文化圏の著名な逸品が整然と並んでいる。日本からの出品としては浮世絵や日本刀等同種の物は日本に残っていない逸品が収納されている。

ロンドンの博物館・美術館等で有名なものを挙げれば、ヴィクトリア・アルバート博物館や国立肖像美術館、地質自然科学博物館、自然博物館、科学博物館、ロイヤル・アカデミー、テート絵画館、ナショナル・ギャラリー、ロンドン市交通局博物館、英国空軍博物館、ロンドン博物館、ウオーレス・コレクション、ロンドン・ダンジョン、マダム・タッソー等フランスのバリと殆ど匹敵する多数の美術館・博物館で満ちている。純然たる美術館としてはバリ、幅広い博物館としてはロンドンであろう。イギリスの博物館は所によっては異種のもが軒を並べて建造され、しかも無料で一般に公開されているものが多く、外国人でも気軽に入場し易い。筆者はロンドン大学のアジア・アフリカ研究所の研究室の中で、古代バビロニアの貴重な壁画がそのまま運び込まれて公開されているのを多大の関心を懐いて鑑賞した記憶がある。いわば霧にかすむロンドンはずべてが文化と歴史の殿堂である。

9. オックスフォード大学 Oxford University

ロンドンの西北方80kmの地点にあって、学都オックスフォードが活気づいたのは古くも13世紀に遡る。学問、宗教、商業の中心地となった小都市 Oxford は、イギリス最初の学園都市として多くの著名な学者、政治家、文化人を生んだ。大学は12世紀にはじまり1249年に最初の College ができ、1264年にはマートン・カレッジ、モードリン・カレッジ、クライストン・カレッジ等、30余のカレッジと世界最古のボドリアン図書館とアシュモリアン博物館が主体となって建造された。

オックスフォードが大学都市として一段と栄えた大きな理由は、イギリスの王室の重要な拠点となり、議会に対立して政治上複雑な関係にあったことが成長の特異の背景となっている。ロンドンが議会派の拠点として大英帝国の偉大な中核であって約4世紀間内外に君臨した首都として著名であるのに対して、オックスフォードは国王の居所であり、もっとも古い歴史と伝統を誇る高雅な雰囲気のある大学都市として発展する。オックスフォードの町の中心を東西に貫通するハイ・ストリートと、クウイン・ストリートに対し、南北にはコーンマーケット・ストリートとセント・オールディックスの通りの4本がカーファックス通りの角の交差点で結ばれる。ここには名高いカーファックス塔が立っているがこの地点がオックスフォード旧市街の中心地であり、古い塔の時計がまことに印象的で万人の注意をひく。ハイ・ストリートの両側の南と北には沢山のコレッジがずらりと並び壮観である。ここから市庁舎を左に見て南下すればクライスト・チャーチのコレッジとキャンパスが長く続くが、ここが本来はイギリス国王の居所をなす館であって、中心にクライスト・チャーチ・ホールが控えている。オックスフォード議会が1644年に盛大に開かれた場所はこのホールであった。今日でも当時のままの面影は残されている。テムズ河の中流はこの南側を流れ国王軍の守りである西と南の防衛線を形成していた。テムズ河の中流地点に現在あるオックスフォード大学のボート部の練習場一帯が昔の王党の軍の重要な防衛線であった。左手にはモードリン・コレッジの高い塔と更に南へ下ればマートン・コレッジの建造物がつづくが、ここは実は王妃の居所として王家のもっとも重要な館であった。

現在の大学の建物は中世のゴシック式建築でできた30余のコレッジからなり、そこには1500名の教師と10,000名の学生が男子29、女子5、合計34のコレッジで学んでいる。各コレッジには壮麗な礼拝堂と学寮とが完備され、師弟は寝食を共にする制度がしかれて、本来ここで学び

うる学生は貴族や特権階級の子弟であり、それらの人々の生活体験に相応しい学舎として発達する。後に出来るケンブリッジ大学と並んで、イギリスの指導層の育成に当たってきた独特の学舎である。1979年からはセント・アントニー・コレッジに日本の経済社会を研究するための日本研究コースが設置され日本研究に非常な熱意を示している。日本の天皇・皇太子の訪問された大学もこのオックスフォードである。英国を訪れたらロンドンから僅か80kmのこの大学都市を一日ゆっくり見学すべきである。一般の外来者も、講堂と寮と食堂以外は自由に見学することができる。日本の大学のように特定の大学人だけのキャンパスに纏って、一般社会人の自由な入場がしにくい校門が控えている訳ではなく、社会から別段隔離されてはいない。市民生活が親しく学生生活と交わっている点はヨーロッパの殆どの大学の特徴である。本来イギリス人の風格として、保守と伝統を重んじ、権威性ある重厚で秩序正しい精神風土を憧れる国民性にまことに相応しい大学環境であると思った。ロンドンの中央にあるロンドン大学は学生数54,000もの大世帯だが、更に気楽に一般市民が親しみ易かった。ロンドンからは反対方向にオックスフォードと対比して出来たケンブリッジ大学においても同様な感覚で訪問することができた。

10. ケンブリッジ大学 Cambridge University

ロンドンの北方90kmの田園に東西南北9km、人口僅か10万の小さい大学都市がオックスフォードの紛争によって生れた。約2000名の教師、研究員と、11,000余名の学生が29のコレッジと6種類の Foundation からなる組織のもとに4つの神学ホールを主体にして、オックスフォード以上にいと壮麗で典雅な風貌の見事な建造物が林立している大学がケンブリッジである。このキャンパスは広大な芝生と生い茂った大樹に囲まれて、校庭の中央を流れる Cam 川の流れに沿って実に美しい環境空間の落ち着きがたま

らしく魅力的に迫る広大な敷地の大学である。広大さから云えば日本の筑波大学が一番巨大であろうし、アメリカのカリフォルニア大学等も全分校を合せば驚く程広大ではあるが、大学環境の美しさから云えばケンブリッジが世界第一のキャンパスと見るべきではなかろうか。平坦ではあるが広々とした校庭と校舎のコントラストがまさに絶景である。大学の創立は1209年、オックスフォードから分離して一部がここへ移転して出来たので、最初に College が創設されるのは1284年のことである。古い伝統を重んずるイギリス流の人間教育の特質として、初めから学寮が完備された点もオックスフォードと同様である。現在では男子13、女子4、男女共学12、合計29の学生寮に学生生活は集中され極めて規律正しい品位の高い生活環境を守りつつ学び、ここでこそイギリス風の gentleman の風格が養成されてゆくものと思われる。中でも著名なのは天文台、スコット南極研究所、アフリカ研究、アジア研究、ラテンアメリカ研究等の研究センターが完備し、留学生も現在約1000名を数える。イギリスの College life の制度のもとで、女王エリザベス2世も、プリンス・エドワードも Jesus College で学んだ。神聖とも云うべき典麗そのものの象徴であるキャンパスの直ぐ前は、10万市民の都市生活の必需品を売る露店が立ち並んで賑わっていた。ここにも時代の推移をつよく感じた。

ケンブリッジのキャンパス内でとくに印象深いものは林立した高い尖塔と小塔の群像、芝生の大運動場と色々の形の中庭のたたずまい、カム河水辺の心なごむ風情とともに、何人も必見の価値あるものとして植物園 (Botanical Gardens) の美しさを推奨したい。

11. ハイド・パーク Hyde Park

ロンドンの中心に大きな公園が7つある。一人当りの緑地比率が世界第一と云われるロンドンで万人の安らぎの場所としてどこが一番相応

しいか、人その人によって美的精神的感覚は異なる。バッキンガム宮殿に面してウエストミンスター寺院や国会議事堂に近い中心地で、溢れる程の咲き乱れた花々と可愛らしい掌に乗ってくる小鳥の群で人々を喜ばせてくれるセント・ジェームズ・パークも皆に愛好されるが、広大で自然の美しさをもっとも雄大に、西端はケンジントン・ガーデンとも連なって大都会の雑踏から完全に分離し、大空の色と連寄せるサーペンタイン池の水とが遠く一線を画して連なり、周囲は見渡す限り緑の芝生に包まれた270万平方m (ハイド・パーク160万平方m、ケンジントンガーデン110万平方m) の景観は自然公園として最高に評価したい。

夏の緑濃き見渡す限りの大樹の繁みも見事なれば、秋の紅葉した落葉樹林の風情もまた一入、筆者が一番愛好する景色は春まだき早春、朝露の中に暁の曙光に映えて静かに全貌を現してくる落葉樹林の遠く連なる幾重にも重なった並木路の遠望である。東雲の陽光は紫に紺青に黄に萌黄に薄青色に変幻万化しつつ霧のロンドンの晴れ渡ってゆく様相である。人と犬とがあちこち散歩しはじめる頃には、もうこの美しい景観は姿を消して現実に帰る。霞たなびく早春のハイド・パークの落葉樹林の梢程、自然の美しさを幻想的に大気の中に漂わせる情趣は他の公園では見ることはできない。この公園で忘れられない業績は、ヴィクトリア女王時代の1851年5月に、第1回万国博覧会の会場としてイギリスの工業力を駆使し、近代産業の真価を余すところなく発揮して産業技術の先端をきり、イギリスの偉力を世界に誇示したという事である。万国博の開催されたことは、全世界の人々に国際協力の重要性を身を似て示したことで、ロンドン万国博を契機に世界にはその気風が漲り、1853年にはニューヨークで、55年にはパリにて、62年には再びロンドンで、67年には再びパリで万博が相次いで世界の重要都市を巡回しつつ今日に至ったことも明記したい。第1回のハイドパーク博では、鉄とガラスの大宮殿全長563m

の水晶宮がクリスタル・パレスとしてこの広大な大会場を圧した光景等歴史に残る快挙であった。

12. ストーン・ヘンジ Stone Henge

イングランドの最古の石器時代の代表的遺石ストーン・ヘンジ Stonehenge は環状列石として特に著名である。ロンドン西南、イングランド最南端ウILTシャー州に残っている巨石記念物で、中央に祭壇石、周囲を四重の列石が並び、石には穴の列が三列重なり合い、その外側には溝が掘られている。環石の広がりは一北東方向に開き中央にヒール・ストーンと呼ぶ石柱が配置されている。祭壇とヒール・ストーンの間を結ぶ線の上に真っ直ぐに夏至の太陽が昇るという、天文学的、暦学的機能を果たした遺構で、中には墳墓にも関係があったとの諸説がある。同種のものに北西フランスのカルナック列石、インド、朝鮮、シベリア、日本の秋田の大湯環状列石等が名高いが、その中でも特に著名なソールズベリー附近のストーン・ヘンジの得難い写真を借用したので、新石器時代のイングランドの姿をも一筆加えた。この大国の遠い歴史を観るとき、限り無く去来する想念の一角に石器時代の面影を偲ぶ思いにかられたのも、国の巨大さのなせる業であろうか。

参考文献

The House of Parliament, A, sadringham
Book, Jarrld Colour Publications
Introduction to London
Windsor Castle
Invitation to Britain, London Tourist Board
Newson, B, *Colourful Wales*
Queen Victoria, Britain Books
St. George's Chapel, Britain Books
Picture Book of London, Lite Limited
Winsor Castle, Official Guide, Thorty of
The Lord Chamberlain
London Tourist's Guide
『世界の旅イギリス』河出書房
藤野年雄『大英博物館』岩波新書
田村秀夫『イギリスの旅』三修社
田村秀夫『ヨーロッパ歴史の旅』三修社
『ヨーロッパの旅Ⅱ』ブルーガイド海外版
水野潤一『ヨーロッパの教養旅行』白陵社
田村秀夫『イギリス革命歴史的風土』中央大学出版部

付記

写真およびこの論文Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴいずれもイギリスとインドに多年留学していた歴史学専攻の長男古川学作品をも借用した上その監修をうけて完成したことを附言する。筆者の専攻は法学・政治学・社会学という社会科学系列であって歴史の専門ではないが、研究の必要上世界各地を歴訪した際、学術書というよりは旅行記に近い文脈でヨーロッパ社会に関する文化・文明像が軽い構想として描かれたのが、以上5冊をつづけたヨーロッパの歴史を通してみた文明観である。内容に誤記のないよう監修させた。

1988. 3. 10

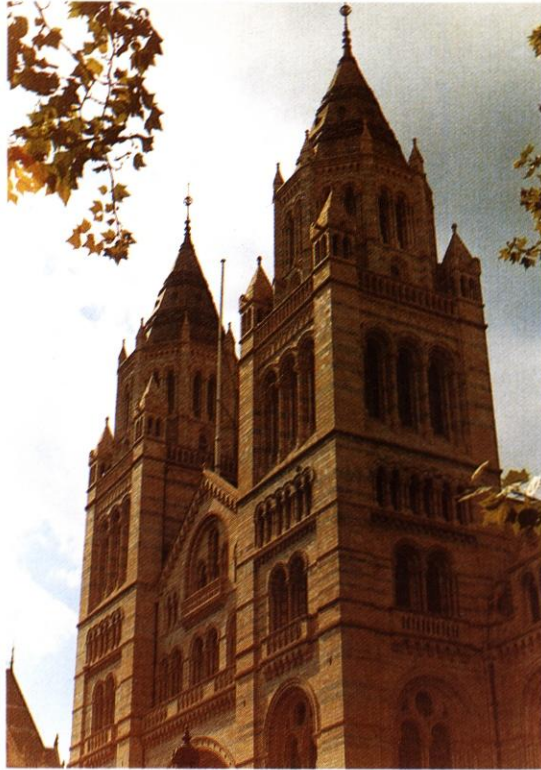


◀テムズ河東南の対岸より眺めた国会議事堂の全景、左に旗の翻っている開会中の上院、右端にBig Ben、ウエストミンスターは上院の左の木陰に見える白い塔

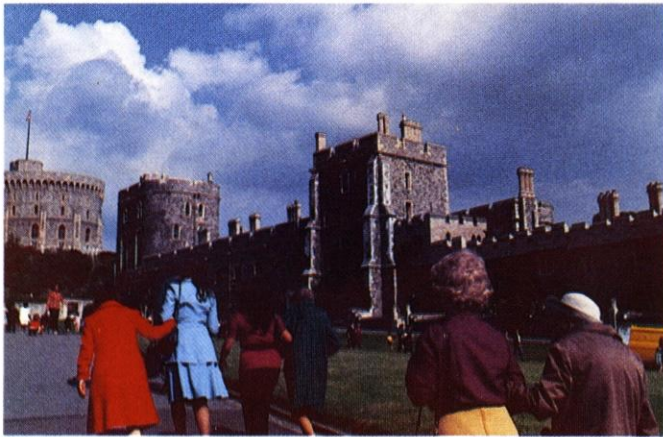
ウエストミンスター寺院▶
の内庭に面した回廊
Cloister、その地下には詩
人の墓が並ぶ



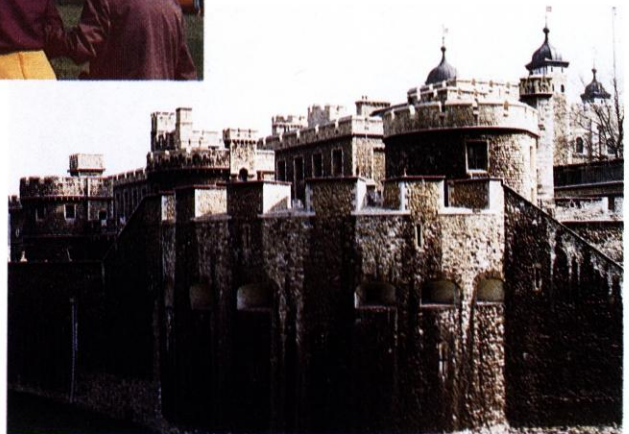
◀タワー・ブリッジ Tower Bridge とテムズ河



◀大英博物館
British Museum の玄関
の塔



◀ウインザー城 Windsor Castle
白雲の下に聳える城館が連る



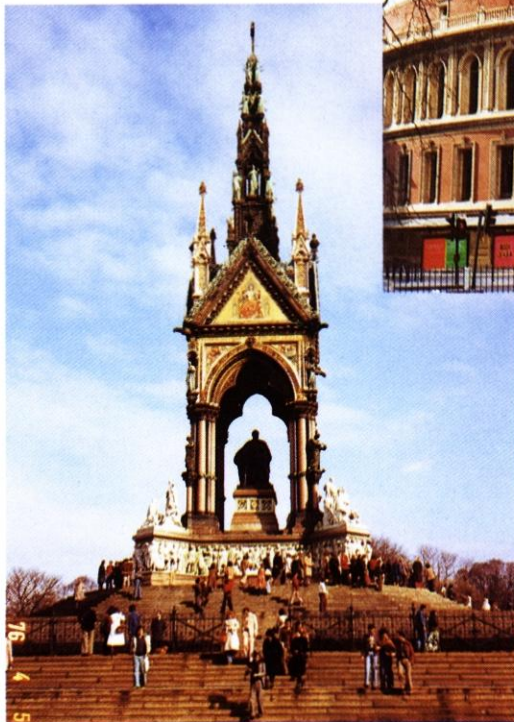
ロンドン塔
Tower of London の外貌▶



◀ テームズ河の北岸、ウエストミンスター・ブリッジの北面に立つ国会議事堂下院の時計台 Big Ben



▲
ローヤル・アルバート・ホール
ロンドン最大の劇場、1867年に
ヴィクトリア女王によって建て
られたもの。その特徴のある外観



◀ ケンジントン・ガーデンのヴィクトリア・
アルバート記念塔



◀大英博物館ギリシャ館の蔵品
ギリシャ神像

大英博物館エジプト館の古代エジプト王朝の▶
彫刻



◀大英博物館ギリシャ館内のギリシャ神像



◀ オックスフォード大学
Oxford University の世界最古の
ボードリアン図書館



◀ ケンブリッジ大学
Cambridge University
St. John's College の学生寮と
芝生の敷き詰められた広大な
キャンパス



◀ ロンドン大学
London University のアジア・
アフリカ研究学院の陳列棚

霧の都ロンドン Hyde Park の▶
初夏のさみどり



◀朝霧の中に霞む早春のHyde Park
の樹々の梢

ソールズベリーのストーン・ヘン▶
ジ Stonehenge

